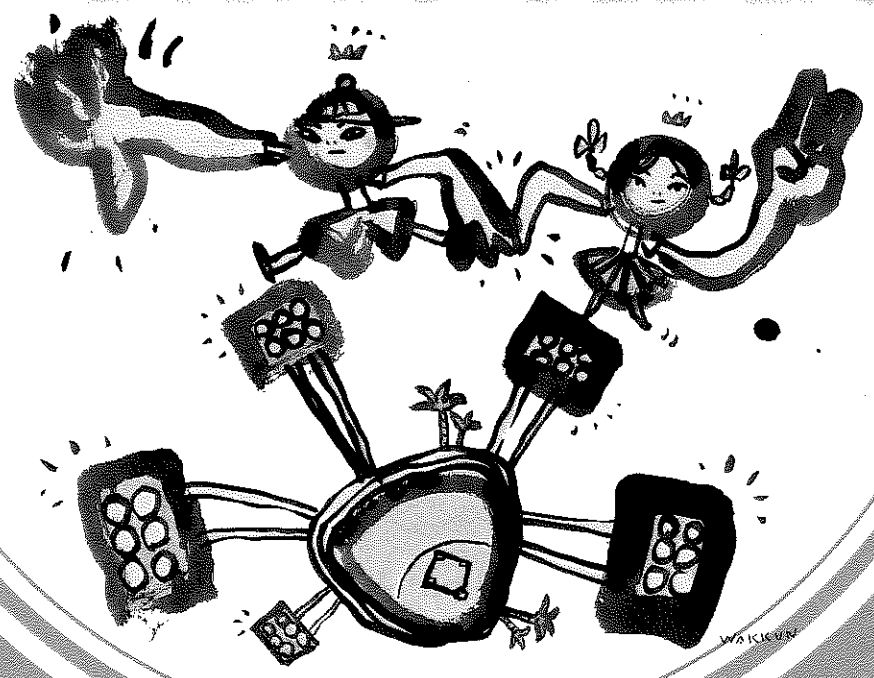
ぼうさい甲子園題字・イラスト：浦嶋克己さん

令和5年度
1.17
防災未来賞

ぼうさい甲子園

表彰式・発表式

プログラム



命守るため 過去に学び、明日につなぐ

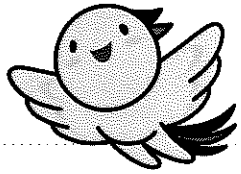
阪神・淡路大震災の経験を通して学んだ自然の驚異や生命の尊さ、ともに生きることの大切さを考える「ぼうさい教育」を推進し、未来に向け安全で安心な社会をつくる一助とします。児童・生徒・学生や団体が学校や地域において主体的に取り組む、「ぼうさい教育」に関する先進的な活動を顕彰します。

開催日時 令和5年 **12月23日(土)** 13:00〜16:10

会場 **兵庫県公館**（神戸市中央区下山手通4-4-1）

プログラム

13:00	オープニング	
	開会のことば	● 河田　惠昭（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構 阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター長
	主催者あいさつ	● 齋藤　元彦 兵庫県知事
		● 木戸　哲 毎日新聞大阪本社編集局長
13:20	表彰式	● 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」表彰（グランプリ・ぼうさい大賞、優秀賞、奨励賞、URレジリエンス賞、はばタン賞、だいじょうぶ賞、フロンティア賞、継続こそ力賞）
		● 防災力強化県民運動ポスターコンクール表彰（ひょうご安全の日推進県民会議会長賞、人と防災未来センター長賞）
14:15	発表会	● 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」受賞校・団体による活動発表 司会：兵庫県立姫路商業高等学校
15:55	講評	● 河田　惠昭
16:10	閉会	



● 主　催　兵庫県、毎日新聞社、（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター）
● 後　援　内閣府、総務省消防庁、文部科学省、国土交通省、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、関西広域連合、ひょうご安全の日推進県民会議
● 協　賛　（独）都市再生機構　● 事務局　（特非）さくらネット

表彰式・発表会

受賞校・団体活動紹介

グランプリ・ぼうさい大賞

中学生部門 岩手県／大槌町立吉里吉里中学校 グランプリ

「巾着で命をつなげ　～HAPPY&SAFETYプロジェクト～」

東日本大震災で甚大な被害を受けた大槌町で暮らす私たちは、震災後に新設された「ふるさと科」の学習で「12年前の震災犠牲者の7割が高齢者であった」ことを学んだ。また、「自分は年寄りだから逃げなくていい」と考え避難しなかった方がいたこと、その方々を説得し避難させようとして命を落とした消防団員の方がいたことを学んだ。地域の方を対象に実施したアンケートでは、「自分のために逃げる」という回答がほとんどであった。そこで「避難することが子供たちの役に立つ」という視点を持ってもらうことが高齢者の避難意識を一層高めることにつながると考えた。プロジェクトは地域をまきこみ、巾着を中学生が作り高齢者に直接配布し、地域の避難訓練で実施することとなった。高齢者がお菓子入りの巾着をもって避難し、不安な子供たちにお菓子を配る。もらった子供たちはHAPPY、避難した高齢者はSAFETY「巾着袋で命をつなげ～HAPPY&SAFETYプロジェクト～」のスタートである。

津波避難訓練

小学生部門 高知県／四万十町立興津小学校

「地域ぐるみのパワフル防災マップ作成活動」

高齢化が進む興津地区では、「災害時に津波から逃げる」はもちろんのこと、「避難訓練」でさえも、参加が難しい人が多い。そこで、「防災のための健康増進」を掲げ、「興津防災パワフルウォーキングマップ」を作成した。これは、ウォークしながら、体力を作り、興津のいいところも眺めながら、防災についても考えることができるようなマップであり、「防災×健康」という視点での取り組みである。興津小学校は今年度末で閉校するが、このマップが地域に浸透することで、学校がなくなっても児童らが地域のために作成した防災マップはその思いとともに残り続ける。そのために、「ウォーキングコース」を新たに作ったり、実際に地域住民とウォークしたりすることで、"閉校後も継続した浸透"を期待し、防災文化の継承発展をめざしている。

フィールドワーク

高校生部門 熊本県／熊本県立熊本農業高等学校 農業土木科 3年生

「地域のコミュニティ拠点となる防災公園づくり」

私たちは、熊本地震や、令和2年には熊本7月豪雨での水害など多くの災害を体験してきました。ボランティア活動にクラスの仲間と参加する中で、学校で学んだ農業土木の知識や技術を活かした自発的活動ができないかと考えました。校内の公園づくりのコンセプトを考える機会があり、地域のコミュニティ拠点となる防災公園づくりを目指すことにしました。プロジェクト班がまとめた構想案を基に、コンセプトから測量、設計、施工まで自分たちで作り上げた公園。仲間とぶつかりながら、少しでもより良いものを、いざというときには「地域の人たちの役に立って欲しい」との思いを込めた公園です。この公園づくりを通し、私たちは皆、お互いの成長を実感し合いました。来年4月には、全国に旅立つクラスの仲間、土木技術者としてあるいは農業土木技術者として、懸命に取り組むことを誓い合うことが出来ました。

総合実習（公園づくり）

大学生部門 静岡県／静岡大学教育学部藤井基貴研究室

「教職を目指す学生による「日本の若者をBOSAIの世界へ:防災×IT」プロジェクト」

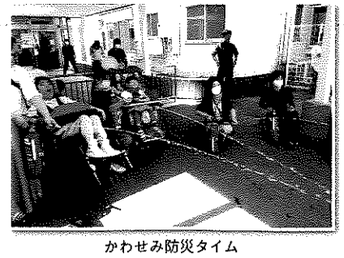
私たちの研究室では東日本大震災をきっかけとして防災教育の教材・授業開発を進めてきました。研究室では「脅さない防災」「考える防災」「伝える防災」を柱として幼児から高齢者までを対象とした包括的な取組を先輩から後輩へと受け継ぎ、国内外に活動の場を広げています。現在もっとも力を入れた取組は「日本の若者をBOSAIの世界へ:防災×IT」プロジェクトです。同プロジェクトはITを活用しながら高校生による防災講座を支援するもので、静岡県・愛知県の八つの高校と連携し、2,000名を超える高校生が参加しています。今年度はデジタルワークブックを制作・配布するとともに、学生代表が一般社団法人BOSAI　Edulabを設立して、動画配信やSNSによる遠隔指導の仕組みを構築しました。また、2023年3月には地元企業と共同開発した防災アプリ「クロスゼロforファミリー」をリリースし、学校や家庭で活用・普及を図っています（現ダウンロード数:2,000件以上）。

大浜ビーチフェスタ

特支・団体部門 埼玉県／埼玉県立日高特別支援学校

「アフターコロナで再びつながれひろがれ!かわせみ防災」

コロナ禍が終わり、これまで感染症対策を理由に制限されていた防災活動を再開した。PTAや行政、企業、社協やボランティア、専門家と連携し、4年ぶりの防災体験プログラムをハイブリット式で実施した。7つのブースの体験ができた。地域の防災イベントにも参加し、ソルトキャンドルを防災啓発用に配布する。防災委員会ではこれまでの毎月11日「ゾウの日」の啓発活動の他、復興イベントで使用するキャンドル作り、本校文化祭での展示、防災ソング・デジタル絵本製作などの活動を行う。ICT活用として防災委員会を中心にマインクラフト風の防災クイズを制作し、全校で取り組む。防災学習については、専門家による校内の非構造物点検でリスク評価をしたものを元に全クラスで「危険な場所と安全な場所」についての防災学習を行った。他にも訓練の事前事後指導用の動画やワークシート活用、学部毎に各教科で防災について取り上げている。


かわせみ防災タイム

優秀賞

小学生部門 埼玉県／上尾市立今泉小学校

「今っ子防災隊 まちづくりプロジェクト ～災害に強く誰にでも住みよいまちへ～」

児童はSDGsのゴール11「住み続けられるまちづくりを」の課題解決を行う中で、上尾市の防災意識を高めるために自身とともに上尾市の防災・減災の取組に協力してもらえる企業・団体を探し、協力依頼を要請するとともに自分たちの活動計画書及び企業・団体に期待する協力内容についての提案書を作成し、様々な企業・団体に計画書兼提案書を送付した。上尾市や自衛隊の協力を得て、避難所を運営に関われる力を養い、今っ子ボランティアクラブを立ち上げた。2月には保護者を避難者役にして避難所の運営を行った。また、ラジオ局の協力を得て、上尾市や伊奈町へ防災に関する情報を提供する今っ子防災ラジオの収録を行い、子供による市民・町民のための新しい防災番組を作ることができた。他にも様々な児童による取組が行われたことによって、上尾市の小学生から大人、障がいのある方、行政、企業・団体などの多くの人々の防災の輪を広げることができた。

中学生部門 大阪府／大阪市立白鷺中学校

「防災を自分事に! ～地域防災の未来を担う白鷺中学校～」

本校は教育の3本柱の一つに防災教育を掲げ、「思いやり」と「そうぞう力」を持ってつながりを大切にした防災教育を実践している。命の教育・人権教育として「心」の教育、災害時に身を守る実動訓練「技」の教育、人と人とのつながり、生き方を学び体現していくキャリア教育として「体」の教育を実践し防災の心技体を育む。全校生徒・教職員・保護者・地域・関係諸機関と協働して取り組む防災授業『白鷺防災デー』は発達段階に応じた内容で学年ごとに取り組み、自助・共助・公助を学ぶ場として定着している。3年間の学びを通して地域防災の担い手となる基礎をつくる。また生徒自主防災チームは防災学習会、校外学習、校区小学校・地域に向けての防災啓発活動でICTを積極的に活用し思考力・判断力・表現力を向上させリーダーとしての資質の涵養を目指している。「住み続けられるまちづくり」の担い手として生徒の成長を願う保護者・地域からの期待も大きい。

高校生部門 三重県／三重県立紀南高等学校

「三重県立紀南高等学校 防災きにゃんプロジェクト」

紀伊半島大水害の被災から10年目となった令和3年、地元御浜町との合同防災ワークショップで講師に迎えた宮城県立石巻西高校元校長の齋藤幸男先生との出会いから、被災地で学ぶ「三重県学校防災ボランティア事業」が実施され、7人の生徒が参加した。参加生徒は、現地で目にした命の明暗を分けた2校の小学校に着目し、「震災で悲しみを抱える人をつくらないまちづくり」を目標に掲げ、誰もが避難しやすい案内版、ピクトグラムの設置を目指して活動を開始した。御浜町総務課に相談すると、設置には、50万円以上の費用がかかることがわかったため、昨年度、地域の事業所から防災用品の協賛を得て「非常持ち出し袋」を作り、地元の道の駅で販売した。これまでコミュニティ・スクールの取組で得た他の商品の売上金と合わせて目標額を達成したため、今年度御浜町へ寄付を行い、年内にこのプロジェクトで誕生したピクトグラムが設置されることとなっている。

大学生部門 大阪府／関西大学社会安全学部近藤誠司研究室

「みんなのぼうさい ～地域メディアでインクルーシブ防災を実現する～」

一人でも多くの命を守るために、特に、弱い立場の人たちにこそ手を差し伸べるために、「インクルーシブ防災」の実現を目指して、数多くの防災プロジェクトを全国各地で実施しています。特徴的なのは、地域に応じた地域メディアを創発・活用して、取り組みの輪をどんどん押し広げていることです。コミュニティFM放送での情報発信（滋賀県草津市・兵庫県尼崎市）、ケーブルテレビ網を活用した情報発信（京都府京丹波町）、手作りの「防災かわら版」によって高齢者に防災情報を伝達（福井県福井市・大阪府吹田市）、校内放送を活用した小学校での取り組み（神戸市長田区）。さらに今、取り組みの輪は、介護事業者、難病患者団体、こども園・幼稚園などにも広がっています。365日、近藤ゼミの情報が発信されない日はありません。ゼミ開講10年。獲得したタイトルは50。卒業生ともコラボして展開を発展させ続けています。「防災活動に卒業なし」です。

特支・団体部門 宮城県／宮城県立支援学校女川高等学園

「防災教育を地域の生涯学習へ　～学校運営協議会との協働～」

「地域と共に学ぶ防災教育の充実」これは、開校以来、本校が掲げている目標である。学校があるのは、12年前に未曾有の自然災害を経験した宮城県女川町。大きな災害を経験した住民と共に学ぶ防災教育の推進を重要課題として取り組んでいる。試行錯誤を重ね、災害から生命と暮らしを守ることに向き合うため、生徒自身が主体となって実践する『総合防災訓練』という学びの仕組みを確立するものの、地域への展開はCOVID-19により阻まれた。しかし、2022年から始まった学校運営協議会の推進や今年5月のCOVID-19の5類移行を契機に、この3年間停滞した地域との交流を再開し、"共に学ぶ"土壌作りを開始した。9月の『総合防災訓練』、10月以降の防災研修会（HUG、原子力災害）は、町や行政区長らが地域へ働き掛けし、参加者を募っている。地域と学校とが役割を分担し、共に防災という共通の課題に向き合い、生涯学習への一歩を踏み出した。

奨励賞

小学生部門 宮城県／伊具郡丸森町立舘矢間小学校

「自分たちで防災について課題を設定し、調べまとめ発信する。」

令和元年度東日本台風で町全体が被災し、全国の支援により着実に復興が進んでいる。少子化により令和4年に学校統合し、学区の広がりにともない災害リスクがさらに高くなっている。それらを踏まえて災害時に地域ぐるみで助け合おうとする気持ちを高めることをねらいとして令和4年11月に「丸森未来防災フェスタ」を開催した。被災経験者からの講話等を基に5･6年児童が考えた防災・減災に関する具体的な取組や提案を地域の方に発表した。また防災グッズの展示、段ボールベッド体験を行った。児童の感想「避難所やボランティアなどについて、いろいろな解決策を考えていて分かりやすかった。」「丸森防災フェスタで学んだことを今後も生かし生活していきたい。」地域の感想「子供たちや先生の意識の高まりを感じた。また地域への発信という意味でもよい取り組みだ。コミュニティ一単位での取り組みを大いに参考にしていきたい。」

中学生部門 福島県／いわき市立好間中学校

「地域と共に、総合的な学習の時間における好間中防災教育」

令和元年台風19号で本校の学区も甚大な被害に見舞われた。そこで、昨年度より本校の総合的な学習の時間において防災教育を実施することとなり、本年度は2年目を迎えることができた。今年度も、市の災害対策課の全面バックアップ、そして新たに地域の大学生、地域の消防団、地域の自治防災に関わる方にも防災学習に参加して頂き地域と共に防災教育を行い、防災に対する意識を向上させる取組を行った。1学年は「自助」、2学年は「公助」、3学年は「共助」をテーマに防災学習を行い、今年度はさらに「高齢者や障がいを抱える人たち」の視点も取り入れた防災学習を実施した。8月には市役所において市長や防災教育に関わってくださった人たちの前で防災学習のまとめを発表し、市長を始め地域の方々より高い評価を得ることができた。学習を通して、生徒だけでなく地域の方々と共に好間町の防災意識を高めることに貢献することができた。

高校生部門 和歌山県／和歌山県立熊野高等学校Kumanoサポーターズリーダー

「空き家問題とJR車両を使用した避難訓練への参加」

平成23年紀伊半島大水害では、死者・行方不明者61名という甚大な被害に合い、当時の仲間が亡くなった。この災害の教訓を生かそうと地域の高齢者・学童・障がい者など災害時要援護者となりうる人々と普段から積極的に触れ合い、絆作りを行っている。高齢者の安否確認では、家具固定調査と昨年5月から住宅用火災報知器の設置確認を行っている。また和歌山県は空き家率（別荘を除く）全国NO.1であり、災害時は避難経路の妨げになるため、移住促進や利活用を活発化させるため、訪問した地域の空き家の聞き取り調査を行い、行政や地元の企業と空き家利活用プラットフォームを立ち上げている。毎年本校では寮に入れない生徒がいるため、空き家を下宿に提供していただけないか提言をし、その結果提供者も現れている。また県内のJRきのくに線は海岸沿いにあり、乗車中の避難訓練に参加し啓発活動を行った。

大学生部門 京都府／龍谷大学政策学部 石原凌河研究室

「対話による防災教育の変革ー波及型学校防災教育の実践を通じてー」

龍谷大学政策学部石原凌河研究室では、2016年の研究室発足当初から徳島県阿南市の小学校を対象に、延べ30校で防災教育出前授業を継続して実施してきている。学校の先生や防災に詳しい地域の方々との「対話」を通じて創り上げたオーダーメード型の防災教育授業を展開している。今年度は、家庭や地域への波及を見据えたタイムカプセルを用いた防災教育出前授業と、学校教員への水平展開を目指した防災教育出前授業を実践してきた。学校防災教育出前授業を基点に、児童と家族や地域の人々との対話を通じて＜繋ぐ＞ことで、地域全体の防災力の向上も見据えている点と、児童・生徒に適した防災教育を目指して、大学生と教員とが対話を重ねながら双方で防災教育授業を創り上げることで、児童にとって真に有用な防災教育を実現できるとともに、学校教員が主体的に防災教育に関与できるまでサポートできている点が私たちの取り組みの最大の特色である。

特支・団体部門 兵庫県／TEAM-3A

「いつでもどこでもだれでも楽しくぼうさい」

元は2013年明石南高校でスタートした「めいなん防災ジュニアリーダーMRDP」のメンバーが2023年5月学校単位での活動をさらに広げたいという思いの高校生11名とその先輩の卒業生13名によって設立された。旧チームは主に学校の周辺地域での活動であったが、昨年からは明石市内の様々な地域や団体からの依頼を受けて活動するようになった。すでに防災DX化プロジェクトのメンバーや明石市防災会議専門委員に選ばれるなど明石市の行政機関からは高い評価をいただいていたが、今年度からこのチームが核となって若い世代が積極的に地域防災に関わっていけるようにサポートする「未来のあかしを担うユース育成プロジェクト」を立ち上げることができた。すでに8月に市長主催で実施される「若者会議」への出席、11月に予定されている市の総合防災訓練へのブース出展のほか様々な団体からのイベントが依頼されている。